

清水慎三さんを偲ぶ

大塚知行(千葉県/東京新聞編集委員)

清水慎三さんが亡くなられた。10月18日、突然の訃報に私はことばが無かった。83歳の誕生日を10月1日に迎えたばかりで、20日の総選挙投票日を直前に控えた日の朝だった。

子息の克郎氏によると「父は自分の死期が近いのを予感していたのではないか」とのことである。知人や友人に「入院したことを知らせるように」克郎氏に伝えていた。しかし「知らせるのは、総選挙が終わってからにして欲しい」と、戦後革新政治に一貫してかかわってきた人らしく、選挙戦を闘っている人々への配慮をみせた。その配慮も届かず、しかも自らの造語による「社会党・総評ブロック」の壊滅的な現状を、おそらく傷心を秘めた諦観のうちにみすえながら、世を去った。

清水さんは協同総研の顧問でもあったし、日本社会党左派も含めた革新陣営の政治や、総評を中心とした労働運動に関心のある人には、その活動歴も知られている。しかし、自分のライフ・ヒストリーに『戦後革新の半日陰』(日本経済評論社)と命名したように、表舞台に立つことが少かっただけに、いわゆる著名人ではない。とくに若い世代の人にはなじみが薄いだろうと思われる。

戦前、今の新日鉄の前進である日本製鉄に入社し、内閣企画院出向。戦後は経済安定本部勤務を経て、総同盟調査部長、鉄鋼労連初代書記長。左派社会党中執、総評長期政策委員会事務局局長など、労働運動、政治運動の第一線で活躍、60年代後半から信州大学、東京大学大学院、日本福祉大学で教鞭をとった。

この間、鉄鋼労連や総評全国一般の創立にか

かわったり、左社綱領論争では「清水私案」を起草して、故向坂逸郎氏ら労農派グループと対立した。総評組織綱領草案を起草し、労働組合の職場活動家に多大の影響を与え、構造改革論争では、イタリア共産党の理論を評価しながらも、日本の諸制約的条件やそれが派閥的に歪曲された形となったことを「不幸な出発」と批判。60年安保闘争を前にして、社会党内の肯定派であった故西尾末広氏追放に党青年部を動かし、連合結成を諸情勢から必然としながらも肯定はせず、新しい左派勢力の形成に情熱を傾けた。60年安保・三井三池闘争についての論文や雑誌の座談会発言は、各方面から高い評価を受けた。

また清水さんの文章は、内容が硬質であっても一種の香りがある、*『多彩なレトリック』*と評されるユニークさがあった。また、造語の名人で「社会党・総評ブロック」の他にも、「左翼バネ」などマスコミにも多用されたが、厳密なコンセプトからはずれてしまっていて、清水さんを嘆かせてもいたようだ。

清水さんに初めてお会いしたのは、私が政治部記者として労働運動取材しはじめたころで、総評事務局長が岩井さんから大木さんに代った直後であったと思う。その後、記憶に残っているのは73年の日本共産党12回大会の前後に、共産党の路線問題で取材をしたり、「戦後労働組合運動史論」の研究会の傍聴を誘っていただいたりした。

数年前、朝日新聞の中野隆宣編集委員と私を呼んで一晩語り合ったことがあった。その時、清水さんは「現在の運動の中にも、注目すべき新しい芽がある」と指摘され、その最初に「中西五洲さんらがやっている労働者協同組合の運動」を挙

げた。私の記憶にまちがいなければ、二人とも既に五洲さんから労協運動について教えられ、強い共感を覚えていたため、目を合わせて我が意を得たりと思ったものだった。

清水さんは、「社会主義再生の方途」をさぐるアプローチとして「今日の体制を支配する主流の価値観とは異質の、むしろそれに対抗する基軸価値観に支えられた生活文化と、その生活文化を基盤とする社会形成、こういう中味をもったものがなければ腰のすわった運動はできない。体制の攻勢から運動を守り、かつ攻撃に転じることはできないだろう。無論、政権をとっても浮草に過ぎない。そのための社会的基盤を捉えるべきである」と述べている。

基軸価値観については「弱肉強食、支配、抑圧、搾取、収奪の自由放任社会と対置する」べき『平等と連帯の協同社会』ととらえ、「競争と自助を価値の根底におく新保守主義思考に対する対抗」と考えていた。この基軸価値観を体現している運動として清水さんは、労協運動のほかにコミュニティ・ユニオンや生活クラブ型生協、外国労働者との連帯、東京清掃労組型の運動などを「新しい運動の芽」として注目していたのだろうと思う。

ここで指折られた運動は、現在の日本社会において、けっして主流を形成しているものではないし、その本質を理解しようとしている人々も多くはない。しかし、そのどれもが「人間の生き方」や「人間社会の在り方」を問う運動であることはまちがいないと思う。清水さんが「政権をとっても浮草に過ぎない」と喝破したのは、戦後革新運動の渦中であって、その背骨として最も大切なはずの民主主義のぜい弱さを痛感していたからではないだろうか。戦後民主主義を所与のものとして背骨に捉えざるを得なかった革新左翼の運動は「凋落の深淵に落ち込んでいる」のが現状だ。これを打開し、攻勢に転じる可能性を創造する旗手として、清水さんが期待を表明したのが、労協運動などの「芽」であった。

清水さんの戦後の活動は、極論すればことごとく「裏切られ、て孤立していった悲劇の連続であった——といえるように思えてならない。何に「裏切られ、たのか。それは「組織・セクトの論理」にはなかっただろうか。「清水さんはその独自性の強い理論展開ゆえに次第に孤立を余儀なくされていった」という評価がある。清水さん自身も「自立的な左翼一匹狼といったところで人生の終着駅に行きついた」と述べているが、戦後革新運動の対立や分裂、逆の無原則的な合同や統一が、多くの場合、運動の発展や社会主義への接近という見地からではなく、組織やセクトの論理から進められ、「一匹狼」の孤愁は癒されることはなかった。しかし清水さんは「裏切られ、たとは感じないで、まさに「基軸価値観」を共有し得る限りは、「裏切り、をも許容していこうと達観していたのだろう。

「清水理論」の特徴として「前衛・中衛・後衛論」を挙げる人がいる。清水さんの立場は「中衛重視」であり、総評組織綱領草案における職場活動家がその中核としてイメージされていたようだが、協同組合セクターもやはり「中衛」機能として位置付けられるのかどうか。組織やセクトの論理から、あるいは社会・政治の大勢のおもむく方向へ流されていった人々に対しても、「基軸価値観」内における「後衛」とみて、これを敵視はしないという幅の広さが清水さんにはあったのだと思う。

「理論作業の場で早期に内ゲバ化してはならない」「とりわけ、実践の場では受けとめにくい空中戦で精力を使い果たすようなことは繰り返さないように留意するべきです」「大目標を共有しうるならば、相互の理論的営為も実践活動も相対評価する寛容さが必要だと思います」——。いずれも清水語録だが、清水さんの座右の銘は「氷心は玉壺に存り（逆境にあっても志は大切にしまっている）」であった。